様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２２３

研究課題名（和文）無住道暁の学問基盤と遁世僧ネットワークについての総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of the Foundation of Dogyo Muju's Scholarship and the Network of Secluded Monks

研究代表者
小林　直樹（KOBAYASHI, NAOKI）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：４０２３４８３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：無住の学問基盤の形成期のうちでも取り分け重要な東福寺の円爾のもとでの修学に焦点を当て、円爾が南宋から持ち帰った新しい教学を無住がどのように受容したのか、また修学環境の禅林で無住が披見しえた最新の宋代典籍にはどのようなものがあったのか解明を試みた。さらに、無住を取り巻く遁世僧ネットワークに注目することを通して、その著作に収められた遁世僧説話の取材源や伝承経路および語りの視点についても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the primary study during the formative period of the foundation of Muju’s scholarship, completed under the monk Enni at Tofuku-ji temple. In addition, it attempts to clarify how Muju received the new education and learning that Enni brought back from the Southern Song dynasty of China and what was contained in the newest books of the Song that Muju studied in the environment of a Zen temple. Furthermore, by observing the network of secluded monks that surrounded Muju, this study clarifies opinions regarding these stories, elucidates materials discussing the narratives of the secluded monks, and demonstrates the means by which the folklore contained in these writings was passed down.

研究分野：日本中世文学

キーワード：無住　学問　遁世僧　南宋　円爾　東福寺　法華経顕応録　高野聖

１．研究開始当初の背景

無住道暁については、近年、国文学のみならず、日本思想史や歴史学、仏教学など多彩な学問領域からのアプローチを得ることで、その研究は活況を呈しつつある。さらに、2011 年には無住七百回忌を記念して、上記諸分野の研究者が参画して編まれた『無住―研究と資料』も刊行され、無住研究はここにひとつの画期を迎えようとしている。

本研究は、そうした上げ潮にある研究動向を受けて、いまだ十分に解明されているとは言い難い無住の思想学問の基礎的側面とそれと不可分の関係にある説話の取材源や位相の問題の双方を総合的に明らかにしようと意図したものである。

２．研究の目的

（1）無住の学問基盤の形成期のうちでも取り分け重要な東福寺の円爾のもとでの修学に焦点を当て、円爾が南宋から持ち帰った新しい教学を無住がどのように受容したか考察するとともに、修学環境の禅林で参照し得た宋代典籍の如何についても明らかにする。

（2）『沙石集』をはじめとする無住の著作をもっとも特徴付けるのは遁世僧説話であると言っても過言ではないが、無住を取り巻く遁世僧のネットワークに注目することを通して、そうした説話の取材源や伝承経路を考察するとともに、無住の遁世僧説話の位相を明らかにする。

３．研究の方法

（1）無住の東福寺円爾のもとでの修学について、その反映が著しいと考えられる晩年の著作『雑談集』『聖財集』を中心に考察する。まずは比較的豊富な法華経関係記事を分析し、無住の法華経解釈に東福寺の修学がいかに投影しているか、『大日経見聞』や『瑜祇経見聞』など円爾の講義録も参照しながら調査を進める。

（2）無住の著作には出典未詳の中国説話が少なくなく、しかもそれらには無住の前後の時代の説話集には収録されることのない珍しい話柄のものが多い。無住は京都や鎌倉の禅林における修学の場でそうした説話を含む典籍に出会った可能性が高いと予想される。中世禅林の代表的な蔵書目録であり、円爾将来の典籍を核として成る『東福寺普門院経論章疏語録儒書等目録』を参照しつつ、大日本続蔵経をはじめとする各種大蔵経所収の南宋代成立中国撰述文献から調査を進めていき、無住の禅林における宋代典籍の受容について究明する。

（3）無住の周囲には西大寺流律僧、東大寺戒壇院流律僧、泉涌寺流律僧、栄西流や円爾流の禅僧など、遁世僧のネットワークが存在したと考えられ、それらのネットワークを通して遁世僧説話が吸い上げられてきたものと予想される。遁世僧のネットワークは相互に交渉をもっていたものと思われるが、それはしばしば高野とも接点を有している。そこで、『沙石集』の高野をめぐる遁世僧説話に注目し、その背後にあるネットワークと説話の位相について調査分析していく。

４．研究成果

（1）無住の学問基盤を明らかにする研究の一環として、まず無住晩年の著作『雑談集』の法華経関連記事に注目した。

巻 10「法華信解品大意ノ事」などに示される無住の法華経解釈には、智覚禅師延寿の『宗鏡録』の教説を基に、東福寺における無住の師、円爾の解釈をこれに加え、そこからさらに「私ノ料簡」「自己ノ法門」として自説を展開している場合が多い。また、巻 9「冥衆ノ仏法ヲ崇事」には、無住自らが手掛けた法華講讃についての逸話が記されるが、講讃の場で実際に語られた中国説話は延寿の『宗鏡録』所収のものであった。このように無住の法華経理解には東福寺の円爾のもとにおける修学の影響が顕著に認められる。

一方、巻 7「法華事」では、法華経の経文の例証話として中国唐代の『法華伝記』や日本の『本朝法華験記』の説話が用いられるが、それらに混じって実は中国南宋代成立の持経者伝である『法華経顕応録』の説話も使用されている。本書は日本での享受がほとんど知られていない稀覯書であるが、おそらくは入宋僧が将来した版本を無住は東福寺などの禅林で披見する機会を得たのであろうと推測される。

本研究は無住の法華経解釈活動の分析を通して、その学問にうかがわれる当代性を明らかにしたものである。無住自身は入宋経験をもたなかったが、その学問が当時の東アジア世界に開かれた性格を有していることを具体的に検証した点に本研究の意義がある。

→〔論文〕②

（2）無住の学問基盤解明の一環として、次には、無住の著作中に中国南宋代に成立した新しい時代の典籍がどれほど影響を与えているかを調査した。

その結果、浄善重撰『禅林宝訓』(『沙石集』)、王日休撰『龍舒浄土文』(『沙石集』)、宗暁撰『楽邦文類』(『聖財集』、『沙石集』裏書)、同『法華経顕応録』(『雑談集』)、陳実編『大蔵一覧集』(『沙石集』、『雑談集』)、『如々居士語録』(『雑談集』) といった典籍との直接・間接の影響を指摘することができた。

如上の典籍のうち、『法華経顕応録』と『如々居士語録』は、これまで日本における享受がほとんど認められていない書物であるだけに、無住による摂取はとりわけ注目されるところである。東福寺や寿福寺といった禅林で学んだ無住は、入宋僧によって南宋からもたらされたそうした新しい典籍を披見

する機会に恵まれたものと推測される。実際、『禅林宝訓』、『楽邦文類』、『大蔵一覧集』、『如々居士語録』については、無住の師である東福寺円爾の将来典籍を核として成る『東福寺普門院経論章疏語録儒書等目録』に書名が挙げられており、無住がそれらを披見しうる環境にあったことが裏付けられる。

無住の著作、とりわけ『雑談集』や『聖財集』といった晩年の作は、入宋僧の将来した典籍とその講義という、当時の最新の情報知識によって花開いた成果という面が大きいことを、本研究では明らかにした。(1) と同様、無住の学問が東アジア世界に開かれた性格をもつことを解明した点に本研究の意義がある。ただし、ここでは無住の著作中の説話的記事に限定しての調査であったため、今後さらに幅広い角度からの考察を行うことにより、その著作にうかがえる同時代の海彼世界との交流の相についてさらに闡明していくのが課題である。

→〔論文〕③

(3) 無住が直接参照したことが確実視される稀覯書、南宋の宗曉撰『法華経顕応録』については、すでに上記 (1) (2) でも触れたところだが、無住の本書享受の具体相についてさらに踏み込んだ考察を行った。

無住は『雑談集』にこの『法華経顕応録』とともに唐の僧祥撰『法華伝記』を用いているが、後者を「唐ノ法華伝」と称するのに対し、前者は単に「伝」とだけ記して、両者を截然と区別するとともに、一見後者を高く評価するような姿勢を見せている。ところが、『雑談集』で「唐ノ法華伝ニ見タリ」として引用される説話は、実は『法華伝記』だけでなく『法華経顕応録』にもことごとく同話ないし類話が収められているのであり、その本文を詳細に比較すると、無住はいずれの説話においても『法華経顕応録』を参照し、その情報を説話構成に活かしていることが判明する。

『法華経顕応録』の撰者宗曉は天台浄土教の学僧であるが、戒律・禅定・智慧のいわゆる三学が重視された南宋の仏教界に身を置いた者だけに、本書所収の持経者伝には戒律や禅定に関わる記述が、唐代の『法華伝記』に較べはるかに多い。やはり南宋仏教界の雰囲気を伝える東福寺をはじめとする禅院で学び、戒律や禅に深い関心を示す無住にとって、『法華経顕応録』の持経者伝はその点で極めて魅力的な存在であったと推測される。他方、自身法華持経者であり、法華講讃を手掛けることもあった無住は、平安時代以来、法華講説の場において尊重されてきた『法華伝記』の権威も無視することはできず、その結果、表面的には従来の伝統を踏襲して、あくまで『法華伝記』に依拠しているように装いながら、その権威を借りて、裏では愛読する『法華経顕応録』によって密かに説話の肉付けを図っていたのであろうと推定される。

本研究は、無住の法華持経者伝享受の実態を通して、伝統と新風がせめぎ合う直中にあった彼の学問の一端を明らかにしたところに意義がある。また、あわせて法華講説の歴史の中で持経者伝の占める位相について新たな知見を提供しえたところにも価値を有する。

→〔学会発表〕②、〔論文〕①

(4) 無住を取り巻く遁世僧のネットワークは、西大寺流律僧、東大寺戒壇院流律僧、泉涌寺流律僧、栄西流や円爾流の禅僧など複数の系統に分かれるが、しかもそれらは相互に密接な関わりをもっていたことが知られる。本研究では、上記の遁世僧とも接点を有する高野の遁世僧ネットワークについて考察を行った。

『沙石集』には、真言と念仏を兼修し、禅にも関心を寄せた行仙という遁世僧の往生話が語られ、無住は彼に深い共感を示している。行仙は金沢文庫蔵の零本『念仏往生伝』の撰者でもあるが、該書に収載される説話からは彼が高野山の明遍の宗教圏に近いところに位置した遁世僧であることがうかがえ、行仙自身、もとは高野聖であった可能性も考えられる。

一方、『沙石集』にはまとまった数の高野聖の説話が収められており、無住の周辺にも敬仏房をはじめとする高野聖や高野聖出身の遁世僧が存在したことは間違いなく、行仙の往生についての情報を無住に届けたのも彼ら高野聖であったと思われる。同様に、『沙石集』所収の高野聖説話はもとよりのこと、他の遁世僧説話も、いずれもさまざまな遁世僧のネットワークを通して無住のもとに吸い上げられてきたものと推定され、そうした伝承には遁世僧の視点が顕著に反映している。

加えて注目されることは、『沙石集』には実賢や公顕のような遁世僧に親和的な官僧の説話も存在し、彼らの姿もまた遁世僧の視点から語られていることである。そして、その視点が、遁世僧でありながら僧正に就任するという矛盾に満ちた行動をとった栄西に対する視点とちょうど表裏の関係にあること、そうした官僧や栄西の説話を語ることがともすれば世間の冷たい視線に不安を覚える遁世僧にとっては精神的な慰安となる側面があったことを指摘した。

本研究は『沙石集』という作品の中核をなす遁世僧説話の基本的な性格を明らかにした点に重要な意義を有している。また、当該説話は歴史学の史料として用いられる機会も多く、その意味でも研究の波及するところは小さくないと考える。

→〔図書〕②

(5) 無住を取り巻く遁世僧ネットワークを通して吸い上げられてきた説話には、遁世僧の視点が刻印されていること、(4) に記した

通りだが、その結果、葬送儀礼に従事するという遁世僧の性格をも反映して、当該説話は中世の生と死に関する興味深い認識が随所にうかがえる内容ともなっている。(4) の付随的研究として、無住の遁世僧説話を通して中世人の死生観に関する考察を行った。

まずは魔道の問題である。『沙石集』巻 10 本-10 には高野聖の往生への不安がつぶさに書き留められた一連の説話が存するが、そこでは往生に失敗した者は魔道に墜ちたとされる。魔道の具体的なイメージは巻 1-6 では春日の〈地獄〉としても語られている。無住は 9-20 においても魔道（天狗道）について説明を試みているが、彼をはじめとする遁世僧の著作に魔道の記述は突出して多い。貞慶『魔界廻向法語』、明恵『却廃忘記』、慶政『比良山古人霊託』などいずれもそうであるし、『天狗草子』の著者も遁世僧と考えられ、その成立圏は無住の宗教圏と近接しているものと予想される。ここから、魔道はもともと、菩提心を重視し、偏執を嫌い、三学兼備、諸宗兼学を志向する遁世僧（ないし彼らと志向性を同じくする学侶）の間を中心に成長してきた概念なのではないかと推測した。

次には遺骨認識の問題である。『沙石集』巻 9-2 には恋人を思い死にした女が死後、蛇に転生しながら、荼毘に付されたその遺骨もまた小蛇に転成するという異相を示す説話を語る。本話は霊魂が死後もなお遺骨に留まるという、中世期の新しい遺骨認識を表す説話と考えられる。一方、10 末-13 では、(4) でも触れた行仙の往生譚が語られるが、そこでは荼毘に付した際に灰の中から舎利が出現するという、平安期の往生伝には認められない新しい瑞相が記される。おそらく両話は無関係ではなく、悪道に墜ちた亡魂の遺骨に異相が認められるとすれば、往生を遂げた人の遺骨にもそれ相応のしるしが現れてしかるべきという発想に基づき、高僧舎利の出現が往生の瑞相として語られ出したのではないかと推測される。

本研究は、無住の著作が、中世の死生観に関わる考察に恰好の素材を提供しうるものであることを示した点に価値があり、思想史の領域にも影響を与えるところが少なくないと考える。

→〔学会発表〕①、〔図書〕①

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 小林直樹、「無住と持経者伝―『法華経顕応録』享受・補遺―」、『文学史研究』、査読無、55 号、2015、pp.53-62
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000007repository_111E0000001-55-4

② 小林直樹、「無住の経文解釈と説話」、『説話文学研究』、査読有、48 号、2013、pp.24-32

③ 小林直樹、「無住と南宋代成立典籍」、『文学史研究』、査読無、53 号、2013、pp.41-63
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000007repository_111E0000001-53-3

〔学会発表〕（計 2 件）

① 小林直樹、「中世日本仏教の死生観と鎮魂―遁世僧の視点を通して―」、韓日文化交流基金主催 韓日国際学術会議「韓国人と日本人の生と死をめぐる認識比較」、2014 年 10 月 24 日、ソウル（韓国）

② 小林直樹、「無住の法華講説と持経者伝」、法華経絵研究会、2013 年８月５日、富山国際会議場大手町フォーラム（富山県富山市）

〔図書〕（計 2 件）

① 小林直樹 他、景仁文化社、『韓国人と日本人の生と死』、2015、pp.131-156（「中世日本仏教の死生観と鎮魂―遁世僧の視点を通して―」）

② 小林直樹 他、和泉書院、『論集 中世・近世説話と説話集』、2014、pp.177-199（「無住と遁世僧説話―ネットワークと伝承の視点―」）

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　直樹（KOBYASHI, Naoki）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：４０２３４８３５